

〔萬代狂歌集三秋〕旅館聞鹿といふことを

旅は目のうるみ椀なるゆふけ時鹿のねごろをきくにつけても

〔骨董集上編中〕淺葱椀。

昔、淺葱椀といふ物あり略中慶安の比既ありし物なり略中淺黄椀は、下品の器にはあらざるべ

し、俳諧糸屑元祿七年印本にも、淺黄椀を出せれば、當時もはら用ひたる器なるべし略中御伽名題紙衣

年元文三年印本卷之二に、淺黄椀の事見えたれば、元文の比までもありしもの歟、今はたえて名だに聞え

ずなりぬ略中下

〔尤之草紙上〕あをき物のまなぐ

いだす膳部はなに略中せいしつのわん、あさぎごき、

〔貞徳文集下〕將又口切出申候、淺黄椀塗足打、貴様御意得にて、五人前被取揃、急度奉頼存候、

〔好色二代男四〕忍び川は手洗が越

物の靜なる、向ひ島に下屋敷、二百人前の淺黄椀、三町ばかり牡丹島をこしらへ略中下

〔雍州府志七土產〕椀折敷 二條南北新町所製、謂縹椀、黑漆上以縹色并赤白之漆畫花鳥略中近世上

品椀亦造之、

〔一話一言三十八〕醒齋翁の机塚に詣てよめる長歌

四方歌垣眞顔

山の井の、あさくはあらぬ、淺黄椀略中下

〔御伽名代紙子二〕念佛講の酒で酔が廓の座敷踊

今商ひのさかりなる、花塗の椀、折敷、角々までに氣をつけて、費なる事をせず、

〔元祿太平記二〕地獄の沙汰も錢がいはず

縹珍のまくらやわらかに、卷繪の椀にて飯食まぐはせんと、間合あひあの方便ほうべんながら、實まことらしくけいやくし

俊滿